

2020年6月28日(日) 瑞穂キリスト教会 主日礼拝

## メッセージ題 「主と共に、主と共に」

聖書：テサロニケの信徒への手紙一第4章13節～5章11節

牧師：秋山 義也



瑞穂キリスト教会  
2020年6月28日(日)  
主日礼拝  
メッセージ(録画)



### 『主と共に、主と共に』

秋山義也牧師

テサロニケの信徒への手紙一第4章13-5章11節

本日から一週間、私たちの教派、日本バプテスト連盟においては、神学校週間という時を持ちます。牧師や宣教師として召しを受けた神学生の学びや、3つの神学校、神学部の教員や後援会などの働きを覚えて祈ることが一つ。そして、特に神学生たちへの奨学金となる献金を、諸教会が祈り献げることで、私たち、私の献身を祈り求める期間として、また牧師や宣教師になる人が起こされるように、との願いを込めて、この神学校週間を連盟全体で覚えています。連盟の中で、壮年会連合が奨学金の働き、推進を担うこととなり、本日も私たちの教会の壮年からPRをいただきます。

私たちの教会では昨年の9月、教会創立を記念して、瑞穂教会の2代目牧師であり、西南学院大学神学部で実践神学を教えられた松見俊先生をお招きして、「神学入門講座」や、今、この時代に献身者が起こされることについての講演をいただきました。刺激的な、含蓄ある言葉をいただく機会となりました。礼拝後の昼食の時だったと思いますが、ある方が、松見先生に「神学する」という言葉について、質問されました。「神学を学ぶ」は意味が分かるけれど、「神学する」という言葉は馴染みがなく、どういう違いがあるのか、ということでした。そこで松見先生は、今日の神学状況の概要を話してくださいました。ヨーロッパのキリスト教の歴史において、神学が営まれてきたけれど、それはどこか、机上の空論的なものになっていなかったか、20世紀において特に、動的な神学の捉え直しが起き、それが「神学する」という言葉になった、と応答だったと思います。私も6年間の神学部・大学院での学び、牧師になって9年目ですが、神学の学びの尽きない面白さと共に、神学の歴史的な流れ、片鱗がようやく少し見えてきたと思います。キリスト教はこう考える！と宗教改革以来も変わらずにヨーロッパを中心に展開されてきた神学的見解や議論が、世界宣教の出来事から、また、世界各地に起きている事柄にとっては、無味乾燥に映ったのです。南米から発信された解放の神学、という貧困の中にある人々にとっての神学が。聖書の男性至上主義的な視点で語られていることへの問題性から、フェミニズム神学という神学が。白人の視点で語られていることへの、捉え直しが黒人神学となり、また環境の問題に対して、聖書はどう言っているのか、ということがエコロジー神学となり、他にも地域で生れていくアジアの神学とか、アフリカの神学とか。とにかく、世界各地での現場性、課題が多様ですから、神学もどんな人にも開かれたものとして、多様性に富み、もはやキリスト教はこう考える、ではなく、多様であってよく、聖書はその多様性の土台として、福音を告げているのだ、解放や和解、出会いと対話への道を示しているのだ、という神学の動き、神学運動とも呼べるものが20世紀の世界大戦後に各地で起こされて行ったのでした。それは、ここにある痛みを聞いてください、という叫び、祈りから起っている神学、聖書の捉え直しでもあります。ですから、この日本でもキリスト教徒は少ないながら、神学的な学的レベルは様々な先達が留学し還元してきているのですが、日本における神学的課題の展開、今日、教会とは、キリスト教とは、キリスト者とは何かというのは、まだまだこれからなことなのだと思います。新型コロナウイルスの出来事を受けて、世界中が、大きな痛みを経験していますが、聖書はキリスト教は一体どう考えるのか、という、「コロナの神学」も今後、展開されてくるでしょう。こうした神学の学びや動きは、決して牧師や神学者だけのものではありません。全ての人に開かれています。是非ご一緒に学ぶことができると願っています。

本日の御言葉。テサロニケの教会の一人ひとりに、使徒パウロから贈られた手紙も後半に差し掛かりました。彼はとにかく、テサロニケの教会の人たちが、迫害にあってもそこに留まり、キリストへの信頼を失わずにいること。そのことに非常に励ましを受けていることを語ってきました。同じ苦しみにあっても、尚、主に望みをおける幸いがある、と。喜びがあると、語ってきたのです。

ただ、その励ましの思いに留まらず、パウロは信仰者の生活について勧めます。第4章1節、小見出しは「神に喜ばれる生活」となっています。イエス・キリストを救い主として受け入れたのであれば、では一体どういう生活に招かれているのか。あなたはどう生きるのかを問い、共に主に聴く生き方を勧めているのです。「神に喜ばれるために」(4:1)、「夫婦で尊敬し合うこと」(4:3-4)、「隣人同士、兄弟愛をもって互いに愛し合うこと」(4:9)、「落ち着いて、自分の仕事に励むこと」(4:11)などです。

このように語った背景には、テサロニケはじめ、当時の教会において、大きな関心事があったことがみえてきます。それは、世の終わりのことでした。

マタイ 28:18~20 に復活した主イエスの言葉があります。大宣教命令、と言われるか所です。「イエスは、近寄ってきて言われた。「わたしは天と地の一才の権能を授かっている。だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によってバプテスマを授け、あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」このように世の終わりまで共にいてくださる主イエスを宣べ伝える働きを、主イエスは弟子たち、教会に託していかれました。そして使徒言行録 1:11、復活し主イエスが天に引き上げられた際に、天使がこう告げるのです。「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」主イエスよ、来て下さい、「マラナタ！」という祈り、信仰の言葉がここから教会の礼拝で定着していきました。

世の終わりがすぐに来る。その時には、主イエスがまたおいでになる。そう信じていたテサロニケ教会の中で、眠りにつく人、つまり天寿を全うして死を迎える人が出てきました。すぐに世の終わりがくるのではないのか。次々に、死者が出ていくのであれば、その人たちは、遺された私たちはどうなるのだろうか？いつくるのか。世の終わりに復活が起きると言うが、起きないのではないのか。ならば、信仰を持って生きるというのは、意味があるのだろうか。という声が出ていたのです。

それに対して、パウロは答えます。「イエスが死んで復活されたと、私たちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいませ。」

(4:14)、「神はわたしたちを怒りに定められたのではなく、わたしたちの主イエス・キリストによる救いにあずからせるように定められたのです。主は、わたしたちのために死なれましたが、それは、わたしたちが目覚めていても眠っていても、主と共に生きるようになるためです。」(5:9-10)パウロは死を眠っている状態だと語りました。眠るという行為は、起きるという連続の中にある、活動でもあります。主イエスが死から復活されたという出来事信じるならば、眠っている人たちはいつか起こされる日がくる。空中にて出会う、そのような日がくる。私たちのイメージを超える世の終わりの日に、主イエスが会いにきてくださる。私たちは見えなくても、私たちが生きていても死んでいても、いつまでも主と共にいる。(4:17)主が、共にいてくださる。主は私たちを忘れてたり、見放したりはしない、とパウロは語ったのです。

今から 2000 年前の「当時の」教会の関心事としての世の終わりのことを私は語りました。そして、そのような関心は、私たちの生きている間は世の終わりはこない、だったら、もっと自由に生きていいのではないか。主イエスが来ると言ったのに、来ないじゃないか。信じることに對して、メリットがないと、一度信仰に入ったものの、自堕落になっている人々もいたと想像します。このような姿は、どこか今、ここに生きる私たちにも重なるところがあるのではないのでしょうか。主イエスの誕生から 2000 年。神の国が近づいた、という主イエスの福音宣教の開始からも同様の年月が経ち、私たちはもはや「いつですか？主よ」と尋ねることもなく、日常を過ごしているのではないのでしょうか。

本日の 5 章の始まりは、私たちにとっての「世の終わり」に對する、目覚まし時計となる言葉です。1～3 節。いつやってくるか、誰にも分からない出来事。しかし、私たちは、ハッとさせられるのです。新型コロナウイルスの出来事を受けて、世界の混乱の様相を私たちは見えています。本日の K 兄の証しにあったように、誰が今から 6 ヶ月前、こうなる事態を想像できたのでしょうか。そして、死が突然にやってくる、私たちの人生の終わり、現在の世の混沌を思う中で、私たちは少なからず「世の終わり」を意識したのではないのでしょうか。「滅び」や「破滅」を考えたのではないのでしょうか。医療が発達し、衛生環境が整えられ、薬がある。「無事だ！安全だ！」とっていたのではないのでしょうか。しかし、突然にやってくる出来事に対して、そうした言葉が空しく響くのです。

私たちバプテスト連盟には宣教研究所という機関があります。牧師になってからも、神学的研鑽を積める機関として、神学校とは別に研究や教育の機関として設けられ、先に紹介した松見先生がこの宣教研究所の立ち上げを担われました。現所長の朴・さうく先生が、コロナのことを、今日説教の冒頭で触れたエコロジー神学の視点で発信下さっています。この新型コロナウイルスの発生源は、まだはっきりと分からないし、これからも分からないかもしれない。未知なるウイルスとの遭遇、それは、私たち人の側が環境を取り壊し、眠っていたものを起こすような境界線を越えたことによるのかもしれない、という趣旨の言葉をニュースレターに書かれていました。それを読み、また今日の「無事だ。安全だ。」という 3 節のみことばをよく黙想していた際の朝刊の見出しは、リニア新幹線の開発延期のニュースでした。静岡県知事の訴え、県民としての大井川の水の問題、開発による汚染や破壊による懸念の思いが著されてきました。ここに、私たちはまた一つの神学の課題と共に、世の終わりの出来事をみるのです。人の側から見た、メリット、豊かさの面では、リニアは有益でしょう。しかし、神が人と同じく創られた自然や動物、植物にとってはどうだろうか。そうした視点をもって、私たちは「無事だ。安全だ」という言葉に生きていないだろうか、踊らされていないか！？と、御言葉が迫ってくるのです。新しい未知なるウイルスとの遭遇によって、私たちは今、何を学んでいるのかを、御言葉から問わりたいのです。

パウロは、主の日、世の終わりの日が、盗人のようにやってくると譬えました。これは大変ユーモアにあふれています。泥棒はだれも予告してきません。明日、あなたの家に何時に行つて、これを盗むからと言いません。そういう電話があつたら、私たちは備えます。警察に電話をします。鍵をかけます。貴重品を携えて逃げることができます。備えることができるのです。

しかし、そうした予告は一切ないのです。人がいつその日が来るかは知り得ないのです。だから、私たちができることは、日々、備える、ということなのです。いつきてもいいように、主を迎える準備をするのです。目を覚まして、互いに励まし合い、神の武具を身に着けて、備えるのです。ペトロは、「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」(二ペトロ 3:10) と語りました。

主イエスの復活、昇天から 2000 年。神様にとってはまだ二日、というわけです。世の終わりの出来事は、私たちの目にとって、今日くるのか、明日くるのか、それとも 1000 年後か、分かりません。1000 年後であっても神の目からしたら、1 日延びただけです。

私たちは、緊張して毎日を過ごしたい。一日一日を神様からの大切な贈り物として過ごしたい。神への感謝、隣人への愛を表すことに、積極的でありたいのです。信仰と愛を胸当てとしてつける。救いの希望を兜としてかぶる。この生き方は誰が見ても、この人の生き方は、キリストの生き方だと思われる、そのような生き方をしなさいということです。キリストを着、キリストに似た者とされて、生きるということです。一日の最後に、今日、私は他者を自分のように愛しただろうか。主なる神を心から、愛しただろうかを振り返ってみたいのです。その振り返りと共に、尊敬をもって他者と出会い、信仰をもって主に頼り、希望を持ち続ける、将来に及ぶ出来事をイメージしたいのです。主の日、主とまた会う日において、私たちが神様にとって喜びとなるのだと、そのように待ちつつ、また急ぎなさい、と今日私たちに聖書は語りかけています。皆さんはどう応えるでしょうか。

世の終わりの出来事は、決して悲壮感に満ちたものではありません。目覚めていても、眠っていても、主が共にいて、私たちに慰めと励ましをくださる。わたしたちがどんな苦しみにあっても、救いの希望を与えてくださる。この確信をもって共に歩みだしたい。

神さまのこの思いが明らかになる時、それが世の終わりの日、主イエスとの再会の日なのです。今、この地上での生が与えられ、ゆるさている間、私たちは世の闇の出来事、痛みや苦しみを負わされている出来事、抑圧や迫害、さべつや貧困、いじめの出来事によく目を凝らしていきたい。心を開き、他者の苦しみの声にしっかりと耳を傾け、学びたい。昼の子として、光の子として、私たちはこのような出会いの中で、キリストの光を輝かせましょう。キリストを指し示しましょう。ここにキリストがいて、あなたと共にいて、救いがあるんだ！と力強く証して、この新しい一週も歩んでいきましょう。

